昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和五十九年　十月十五日　発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十六巻　第十号

（通第四二三号）

目次

王舎城の悲劇……近角常観……(1)
ただ念仏して――たのもしさ……池山榮吉……(5)
聞思録……誉田豊吉……(8)
功徳の宝海……井上善右ヱ門……(11)
慈光日誌抄……西元宗助……(14)
内愚外賢……長谷顕性……(17)
凡夫往生の白道……花田正夫……(21)

王舎城の悲劇

近角常観

そも〳〵王舎城の悲劇は従来浄土教の起源としては、何人も知らぬことなき事実なれども、未だ知らざる人の為に、一応お話をして見ようと思います。

仏在世の印度諸国の中で、マカダ国というは最も大国であって、其当時の王ビンバシヤラは非常に有徳の君主であった。現に釈尊が悉達太子として、十九歳の時カビラ城を遁れ、道を求めんがために山に入らんとして、マカダ国を過ぎたまいし時、ビンバシヤラ王は平素常に太子を慕いしゆえ、これを止めて、若しカビラ城が小にして不満足であるならば、我国の一半を譲りましょう。若しそれでも不足なれば全体でも譲るから、これを治めたまえとまで云われた人である。この時太子は、我は此の如き俗的の王国を望むのではない。安心の道を求めるのであると云われたので、ビンバシヤラ王は、然らば太子若し道を得たまいたならば、先ず来って私に之を授けたまえと云われたとの事である。

かく有徳なる君主なるに拘らず、宿世の因縁によりて、実に不孝極まる太子を持たれた。即ちアジヤセ王がそれである。仏成道の後、故郷に帰えられた時、釈迦族の皆が出家して仏の教団に入ったが、その一人の仏の従兄弟に当る提婆と云える人は、余程峻刻厳厲な性質の人であったと見えて、仏の教団中に於て、仏の弟子に対する対度が、寛容であることを甚だもどかしく思うて、手厳く弟子を訓練したいと申し出たが、仏がこれを許したまわぬので、大に不平であったと云うことである。ここに彼は、自分は仏陀に代って、思う存分にやって見たいと考え、就いては一大帰依者を見出さねばならぬというので、このアジヤセ太子をそそのかし、その父の王ビンバシヤラを殺して位を奪わしめ、彼の助によって自らもまた隠謀を実行しようと企てた。

ここに王舎城中、大なる悲劇が起って来た。

アジヤセはダイバのそそのかしに従って、父の王を収執して、七重の室内に幽閉した。王妃のイダイケ夫人は、頗る愛情の深い人で、如何にもして王を慰めたてまつらんと

思い、色々工夫の末に、先ず我が身を清浄に洗い、よく製した麦粉を蜜で煉って、それを自分の肌に塗り、浄衣をもって其上を覆いかくし、又その上に飾るところの瓔珞の一一に、葡桃の漿を盛りて、蠟を以て之を封じ、出来上って後に、常の如く之をまとい飾って、ビンバシヤラ王の牢獄の中に行き、ひそかに食物を進めた。王はこれを喫し終りて、清水を求めて口を嗽き、合掌恭敬して遙に仏陀を礼して、願って云うには、大目犍連は我が親友であります。どうぞ世尊慈悲をもって彼を遣わし、私に八斉戒を授けしめたまえと。よりて目連は、恰も鷹の飛ぶ如く、疾く王の所に到りて戒を授けられた。毎日この通りに目連が戒を授ける上に、なお仏陀は、能辨の誉れあるフルナ尊者を遣わして王の為に説法せしめられた。此の如く一方には肉体上の食物を得、又精神上の糧をも得て居るために、ビンバシヤラ王は、顔色和悦にして、三七日を経るも何等の変りもなかった。

ここにおいてアジヤセ王は不審に思い、自ら往きて取り糾さんとて、先ず牢の門番に向って、父の王は未だ生きて居られるや否やと巧に問いかけた。門番は事情をありの儘に話した。アジヤセは聞くなり火の如く怒って『わが母は是賊なり、賊たる父の王と伴なればなり、又沙門は悪人なり種々の幻術をもって此悪王の命を延ばす』と罵り叫びつつ、左手を伸べて母の髪をつかみ、右手に利劒を執って母の胸に擬し、あわや一息に衝き刺さんとした。母は驚き合掌して、身を曲げ頭を垂れて、我子の手にすがり、全身熱き汗を流して、身心悶絶した。

この時、大臣の月光と耆婆とが、あわてて之をさえぎり、云うには、大王よ、臣等が聞くところ、吠陀に書いてあるには、昔より諸々の悪王ありて、国位を奪わんがために、其父を殺害せるものは頗る多数であるが、いまだ無道に母を害せるものあるを聞かず、王にしてもし此の如きことを為せばこれ刹帝利種の恥なり、汚れなり。臣等これを聞くに忍びず、これセンダラの行なりと、大いにこれを苦諫した。アジヤセもこれを聞き剣を捨て、母を害することだけは思いとどまったが、忽ち侍従に命じて、また深宮に幽閉して、一歩も出さなかった。

イダイケ夫人は獄中に幽閉せられ、心神愁憂し顔色憔悴して、見るかげもない有様になった。遙かにギシャクッ山に向って、仏を拝んで祈念して云うよう。如来世尊、昔日常に阿難を遣わして、我を慰問したまえり。然るに我命不幸にしてこの如き悲境に陥りました。世尊は勿体なくて御目にかかることは恐れ入りますが、願わくは目連と阿難を遣わして、我を慰めたまえと。かく云い終りて悲泣雨涙して、容易に頭をあげることが出来なかった。仏は遙かに、こ

れを聞かれて、親から目蓮と阿難を従えてイダイケの獄中に臨みたまうた。

時にイダイケは頭を挙げて仏を見奉るや否や、自ら身の飾りを引きちぎって、身を挙げて地にひれ伏し、号泣して仏に向って曰く。世尊、我身は宿世何の罪ありて、此の如き悪しき子を生みしか。又世尊は如何なる因縁によりて、ダイバ如き悪人と御親類にてましますか。唯願くば世尊、わが為に憂悩なきところを説きたまえ。私はそこへ生れたく思います。私はこの濁悪の世界に懲り果てました。此世は苦にみたされ、悪人ばかりであります。願くば未来においては、再びかかる憂き目を見たくありませんと云いつゝ、五体を地に投じて求哀懺悔して、切り詰めて願って曰く。願くは仏、我に清浄業処を観ぜんことを教え給えと。仏はここにおいて眉間の光を放って十方諸仏の国土を見せしめられしに、イダイは之を見おわりて、この諸の仏土、何れも清浄にして皆光明あり。されど私は今、西方極楽世界の弥陀仏の御許に生れんことを望む。唯願くば世尊、我を導き給えと申し上げた。仏陀はこれを聞こしめして微笑し給いしに、慈悲の光、仏の口元より溢れて、遙にビンバシヤラ王の頂を照らした。大王の心眼障りなく世尊を見たてまつりて、漸々仏道を進め給うた。

仏陀は此の如く満足なる御貌をもってイダイケに告げてのたまわく「汝今知るや否や、阿弥陀仏ここを去ること遠からず。汝まさに念をかけてあきらかに彼国の浄業を成じたまえるひとを観ずべし」と。実にこの一言はイダイケの心中に徹到して、生ける仏陀の慈悲を感受せられたる根本である。

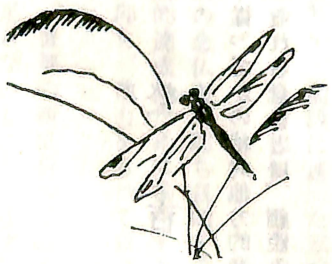
王舎城中の暗澹たる獄中、煩悶苦痛の極に達したるイダイケ。温顔微笑「阿弥陀仏ここを去ること遠からず」と教を垂れたまいし釈尊、けだし宗教的舞台として、実に壮大を極めている。これ観経の説法の初にして、又その要点である。イダイケは仏陀の慰問を受け、心に歓喜を生じ、廓然として心中大に開け、偉大なる信仰を生じ、五百の侍女亦求道の心を起した。実にこれ弥陀の本願力を実験せられたる初めての事実である。而してこの事実は、千古人生において常に起りつゝある事実であり、苟も人生のあらん限り、この仏陀の慈悲ならでは、安慰を得ることはできぬ。

上にあげた某君が、信仰を獄中に得られたる場合と、イダイケが幽閉中に於て光明に摂取せられたる場合とは、実に符節を合わせる如くである。年相隔つること二千余年、地相距つること数千里、而して味うところは同一仏陀の慈悲である。私は、不幸にも監獄にある人は、恰も信仰を得るに最も適切なる境遇であって、我々信仰の眼より見れば、仏陀の慈愛を感ずべく、此の如き境遇に追いつめられたものもある。然るに若し徒らに其機会を失して、却て罪悪の深みに陥るが如きは、甚だ遺憾な次第であると考える。されど一般世上と雖も、自分は監獄に居らぬ故に、以上のことは自分等の境遇でないと考えて居るならば、それは大なる誤りである。首を回らして見れば、人生は実に一大監獄である。到る処に煩悶苦悩の叫びが聞こえて居る。私の『信仰余瀝』にある、「信界に於ける監獄」といえる一章を熟読して下さったならば、此の意味は明瞭である。又人生問題に苦しみつゝある人は、上に挙げたイダイケ及び某君の場合をよく了解することが出来るに相違ない。而して殊にイダイケと云える女性の人が、初めて仏の慈悲に接したということが、最も注意すべきことである。女性の人はとかく煩悶が多いのであるが、其人に対して最も適切なる救済は、仏陀の光明である。これ親鸞聖人がこの事実を以て、苦悩の群萠を救済せんがためなりと、喝破せられたる点である。

此の如くイダイケ夫人が信仰を得られた事実が、観経の要点である。而してこの観経の裏とも申すべきものが、即ち涅槃経におけるアジヤセ王の無根の信を生じた事実である。この事実は頗る長き説話なれども、悪人の救済といえる親鸞聖人の信仰を説くには、省くべからざる点である。

而してイダイケの事実が恰も某君の場合と同じき如く、アジヤセ王の煩悶と罪悪観は、実に私自身が陥りた境遇と全く同じと考えて居る。私は涅槃経を繙くごとに、決して他人事とは思えぬ。しかのみならず、涅槃経の文が、当時印度に行われつゝあった六派哲学の議論では、何等の安心をも与えなんだが、仏陀の慈愛によりてのみ、初めて安心ができたということを、つまびらかに書いてあるので、今日、信仰を求める人が、初は哲学や理論で安心しようと試みて、終にこれに疲れ果てて、最後に仏陀の慈悲に帰して、大安心を得るに至る事実とよく符合している。極言せば、アジヤセ王の得信は、実に現時信仰問題の標本とでも云うべきものである。それゆえ煩わしきをいとわず、次の章において涅槃経の文句通りを、大略叙述しようと思う。

『懺悔録』より、続く。



ただ念仏して——たのもしさ(三)

池山榮吉

さてそのかわりめというのは、大体三つに約することが出来る。その第一は、念仏を目的達成の一助として受入れるので、ここで目的というのは、成仏ということである。一助というのは、成仏の目的を達成するには、外にもいろいろの手段方法があるが、念仏もその一つであると見るので、つまり七つ道具の一つに念仏を加えるのである。そして例えば、その道具を代る〳〵使ってるうちに、慣れてみると念仏が一番使い良い、一番有効だとわかったとすると、それはもう第二、念仏を目的達成への努力の焦点として受入れる、という段に進展してくるので、ここに至っては、成仏への努力、エネルギーが、念仏一点に集中する。但しここで念仏が一番良いというのは、他のものでも全然間に合わないのではないが、という思惑から脱け切らずにいるとも見えるし、且つ念仏一点に集中するとはいえ、それは念仏を我が力のうちに取入れよう、とする動機がそうさせるのであるから、どうもここでの念仏には、相対的自力的の臭味が着いて離れない。従ってかの絶対他力的発揚として、唯一無雙の価値を認められる念仏とは、相距ること遠しといわなくてはならない。

「念仏も棄てたものではないとか、念仏も結構役に立つとか、念仏は他の何物にも劣らないとか、さては念仏にかぎるとか、それ〳〵の思惑に動機づけられて、おのがじし、応分の力を持出して念仏に精進すると、その効験は争えないもの、多かれ少なかれ或る法悦が感じられる。が、困ったことには、いつも柳の下に泥鰌がいるとは限らない。どうかするとさっぱり駄目なことがある。法悦の不連続性、これが其の一、其の二に共通の徴候で、こうした徴候が存続する間は、まだ本当に念仏が手に入ったものでない。その関を超すには、今一度の転化に待たなければならない。

日頃念仏を心にかけて扱ってはいるものの、どうもしっくり身につかない。どことなく拍子が抜けて、手持無沙汰の感を免れないのは、畢竟念仏を作善の具に供しようとするからである。我が手でまかなう資料として扱うからだ。」

長者の一人息子が、若くして父に別れ、巨萬の富を相続して、横の物を竪にもしないで、べん〳〵だらりと暮していた。当時の彼の思っていたところによると、人間は各自定った分量の力を天から授かって生れてくるもので、その力を使い果たした時が、命の終る時となるのだから、力を使うには、なるだけ細く長く小出しにする心がけが肝要で、これが長命の秘訣だと考えていたので、日常の生活も、この原則から割出して、出来得る限り有閑無為ですます方法を構じていたが、栄枯はうつる世のならい、一朝思いがけぬ災難に出遇って、忽ち一文無しの素寒貧、哀れはかない身の上におちぶれ、恥も見得もかまっていられず、通りがかりの人の情にすがって、ものごいの手はじめに貰ったものが、ものもあろうに金貨一つ、しかもその金貨というのが、長者時代に、金貨を支出するたびに、ひょっとまた戻ってくることもあろうかと、一々手づから小さい十字の印をきざんで、手離すことに決めていた、その金貨の一つだったので、わが眼を疑うほどに、且つ驚き且つ怪しみ、万感交々至る中で、今度手離したらもう戻ってきっこはないと、愛着の余り、それを深く内懐にしまいこんで、緊褌一番、傍で働いていた道路工夫の群に投じた。そして働きながら彼は自問自答した。俺は何も今働かなくてもいいんだ、金貨があるんだもの。けれども働くのが面白いから働くんだ、俺はただ道楽で働くんだ、と自から慰めていたが、その後も引続いて労働しているうちに、だん〳〵と、わが生の享楽のために働くのは、少しもわが品位を汚すことではなく、世間から受けた恩の返しとして、世間のためにも何か働く、というそのうちにこそ人生の目的があるんだ、人がその為すべき仕事に全力を尽すのは、即ちその本分を全うする所以だ。と深く自らさとるところがあったという。

これは独逸では、大人でも小人でも皆よく知っている、〝十字の印をつけた金貨〟というお話。対世間の見地に立って、持って生まれた自分の力についての誤った見方から、より正しいそれに移って行く一過程を扱ったもの。

救の力、所謂他力の見方も、だん〳〵と展開する可能性については、さきに一言した通りで、前段に述べた三つの際立った信態の如きも、つまり他力の見方如何、他力の必要性の感得工合いかんに依存する。

前に紹介した其の一、其の二の念仏者、即ち目的を達成する一方法として、もしくは目的達成のために集中する努力として念仏する人は、念仏、即ち、他力をもって自力強化の具としている。

彼等の考えによると、念仏は、彼等の現に持っている力に加勢するものである。自力の足らないところ、及ばない

ところを補うものである。場合によっては、自力でも出来るものを手伝いする、その意味では、自力に使するものでしかないのである。

〃念仏も捨てたものでない〃などというのはまあ此の辺の考えで、恐らく他力の必要性感得の最小限度であろう。進んで〃念仏は他の何物にも劣らない〃とか〃念仏は他の何物より勝れている〃という段になっては、自力強化観の最大限度であろうが、それとても未だ念仏を相対価値として扱う域から脱していない。

私がまだ十二三の時分だったろうか、〃腹が立ったら念仏すると、だん〳〵治まってくる〃と或坊さんの言うのを聞いたり、又母からも同様なことを聞かされたことがあって、子供心に成程と思ったのであろう。時々やってみたことがある、というよりは、やって見ようと思ったことがある。これこそ丁度〃念仏も結構役に立つ〃という見方に立つものであるが、結果ははたしてどんなものか。あたるも八掛あたらぬも八掛、そんなところに見当をつけていれば、あたらずと雖も遠からずであろう。

以上のような、いろ〳〵の動機からでも念仏すると、そのうちに幾分の真面目さが籠る限り、〃洪鐘響くと雖も、必ず叩くを待って鳴る〃で、大きく打てば大きく響き、小さく打てば小さく響く、それ相当の手応がある。するとそれに励まされて、一段と精進する気になる。それがいつまでも続くといゝのだが、どうかするとさっぱりいけなくなってしまう。神通を失った魔法つかいが、いくら呪文を誦えようが、怪しげな振をしようが、さっぱり駄目といった風に、念仏を称えても一向に験が見えないという状態におちることがある。こんな筈ではなかったがと、焦ってみてもにわかに元の様に直らない。そこで今まで持っていた対念仏の考えもぐらつき出す。

こうした知知火的明滅の徴候は、其の一、其の二を通じての弱味である。それというのも〃信心が淳くないから決らない、決らないから続かない〃それからまた逆に〃続かないから決らない、決らないから淳くない〃と、所謂三不三信展転相成の原理で、割れば割切れようが、一口に、彼等は念仏をおのが力のうちに取入れようとするからだ。彼等の態度は、どこ〳〵までも自分の力を主とし、念仏を従としている。従ってその時〳〵の身心の態度と四囲の状況がすこしでも変化すると、その影響で信仰そのものに幾分の動揺はまぬがれない。

こうした信仰の若存若亡の窮境、法悦の不連続性の危機を乗りきるには、今一度の転化、横超的飛翔に待たなくてはならない。

（つづく）

聞思録

孤独の有難味

われ等は概して孤独の寂しさに堪えかねるのである。されど孤独は実に有り難い味をわれ等にあたえる。窮境に陥れば、多くの人は遁れ去って真に人心のたのみ難いことを知る。病苦に長く苦しめば、親兄弟と雖も如何ともなし難く、実に我一人の感を生ずる。順境得意のときはわれ知らず名利の奴となりて虚栄浮薄の風になっておる。信仰の事でも、他がわれを有り難き信者と云い、来訪者が門に絶えぬときは、いつしか驕慢となり、口には仏恩を説きながら、心にはこれを忘れ、いつも「我」が出張っている。これに反して年は老い、身は病みて唯一人訪う者も無いときは、始めて自己の真相がわかり、孤独無力の感が強くなる。この時にあたりて行住坐臥われを見捨てず護りたもう仏のお慈悲をいただくのである。世に捨てられ、人に疎んぜられて、真に仏と真向きになるのである。

それ故に人は富も位も学識も名誉も健康もなくなって、赤裸々の無力罪悪の姿となり、全く世から捨てられ孤独に泣く時、ほんとにお慈悲が味われる。然るにわれは現今幾分の富、位、学識、健康ありて、人より捨てもせられぬゆえ、やゝもすれば気がたかぶり、意おごる傾きがある。されば中夜（午前三時頃）人静まりて後、真の自己を反省し孤独寂寥の感に満ち、直ぐに仏に面しその慈悲に浴すべきである。

独楽と共楽

信仰の真髄は独りで仏の恵みを喜ぶ点に存ずる。千人百人の中に存っても我一人仏に対し奉って喜ぶのである。人と共に喜ぶのは、やゝもすると人見せに喜ぶ風になり易い。併し自分の楽しみと人の楽しみと共鳴して喜ぶのはよろしいことである。己れ独り喜べば、他人はどうでも構わぬ

誉田豊吉

というのは独覚である。要は独楽が根本で共楽は末葉である。本が立たずして末のみに走るのはよろしくない。

隔てこころ

われには気に合うた人と気に合わぬ人とがある。気に合うた人と隔意なく交われど気に合わぬ人とは非常に隔りがあって何だかいやな気持がする。そのいやな気持が相手に感じて、その人もいやな気持になる。そのいやな気持が又自分に反応して自分は更にいやになる。かく因果循環、遂に如何にしても破る能わざる障壁が自他の間に出来る。吾人の敵はかくして出来たもので原因は実に深いものである。この自他の障壁を除くには、到底自己の力では出来ぬ。障壁あるを苦にし、又これを除く能わざるを苦にし、困りはてたる際は、仏は一視平等の慈悲を以て、その隔て心のとれぬ処、その苦のある処が可哀想だと仰せられ「われ汝を護らん」と叫びたまう。

われは仏に対してさえ隔て心、疑いの心を以て向い奉つたけれど、仏の隔てなき御心、疑いなき御心、われを信じたまう御心、助けねばおかぬとのやる瀬なき御心に融かされ、始めて頭がさがり、真底から隔て心、疑い心のありしを懺悔する。かく仏から隔て心を除いてもらい、仏を信ずるようになれば、自ら人に対しても隔て心が無くなり、皆兄弟の感があって、誰一人として気に合わぬなどいう御方はないようになる。

されど本来凡夫なれば、信後にても隔て心の出て来ることはあれども、仏のお隔てにならぬ心を頂けばおのずから懺悔の念が湧いて隔て心もとかされるのである。然るに信仰に入って後は、以前に気に合うた人にも合わぬ人にも、いやな思いがなくなり、実に宏々とした気分になれる。これはひとえに仏の御恵みである。南無阿弥陀仏。

真の安心

夜道を行くときわれは少しも恐ろしくなしというは、その実大いに恐ろしきなり。実際恐ろしくなければ、恐ろしとも、恐ろしくなしともいわざる筈なり。胆力を養成せりなどいう人はその実胆力なきなり。真に胆力あれば、胆力の有無など念頭に浮ばざるなり。昼道を行くとき、誰かわれは少しも恐れずなどいう。昼間は少しの恐怖もなく又胆力の入用もなし。是れ真の安心なり。

名利を捨つといい、善悪を超ゆといい、生死を脱すという。これ皆名利、善悪、生死に拘泥せる証なり。つとめて法を求め、励みて仏名を称うるも、亦真に安心せるものにあらず。心中深く仏を信ぜば、何ぞことごとしく法を求め、御名を称せんや。親を知り親に護られておる者は、平素常に親を思わずとも心中何となく心丈夫にして安楽なり。仏を信じ仏に護られておる者は、つとめて仏を念ぜずとも心の奥底に大安楽あるが故に、日常の業務を為すにも実に安心なり。何事にても有意的に努力し、意識的に拘泥する間は真の安心にあらず。かくては窮屈なり、苦痛なり。これに反して、無意的に行い、寸毫も心に繋ることなく、自然任運に進むときは是れ真の安心なり。かくて大自在なり、大安心なり。

唯声を聞きて直進せよ

西岸上、「われよく汝を護らん」との声を聞いて、ありがたく感じ、一心正念、前後左右を顧みることなく直進す。

群賊悪獣も、火の河も水の河も目にかからず、心に浮ばず。唯内心仏の御声を聞き、御力を感ぜば、悦楽きわまりなし。すでに永生である。無上の宝を得ている。この外何を望まんや。

世間の生死、禍福など物の数でもない。唯御声を聞いて進め、結果を考うるなかれ。結果については、仏がわが身に応じてよきようにして下さるなり。唯御声のままに進む。何等の雑念なく疑惑なし。故にその力強し。われはひたすらに仏陀の命、君親の仰せに信順して、其他を顧みざるなり。

凡夫の腹底

凡夫の腹底はいつも五分五分である。ほめられたい、損をしたくないという心が根底をなしている。かく親切をすれば人もそれに感じ自分を徳とするであろう。かく金を出してやっておけば、後には返済してくれるであろう。されば自分は損をせずに親切者の評判を取ることが出来ると思うのである。若し先方が親切も感ぜず、借金も返さず、却って怨言を言いだすと、忽ち瞋恚の心がムラムラと起る。自分がこれほどのことをして置いたら、将来キット結果があるだろうと待ちもうけるのが五分五分相対の凡夫の腹底である。或は自分が何か不都合な事をして先方から叱られるとき、自分は悪いけれど先方も自分のような境遇になったら、自分のような不都合をやるであろう、それなのにあまり先方が同情がないと怨む。境遇が悪い、先方が悪いというのは、やはり五分五分の根性である。これに気づかず思うようになると得意、ならぬと失望落胆する、実に凡夫である。

功徳の宝海

井上善右エ門

親鸞聖人は念仏を「功徳の宝海」と讃えられました。念仏には名号の徳がさながらに宿るからであります。

本願力にあひぬれば　むなしくすぐるひとぞなき
功徳の宝海みち〳〵て　煩悩の濁水へだてなし

と讃仰されているのがそれです。本願力にあうとは名号を聞信することであります。

さてここに功徳とは何を意味する言葉でありましょうか。功徳とは一般に、すぐれた結果をもたらす徳性を意味します。ではすぐれた結果とは何かということです。われわれは功徳という言葉をきくと、功利的な好しい結果を念頭に思い浮べます。梁の武帝が達磨大師に向って、自からの造寺、写経等の功徳を問うたのに対して大師は「無功徳」と答えたのは有名な話しです。武帝は自己の善行に対し好し悪しい結果を期待していたので、どのような功徳があるかと問うたのでしょうが、それは的違いだと達磨は即下に答えたのです。ところがわれわれもまたその轍を踏まないとはかぎりません。

念仏が功徳の宝海であるならば、念仏者は功徳を得る人である。その功徳は人生にあらわれて煩悩を除き苦悩を治するであろうという予想が無意識の奥に宿っているとすればどうでしょう。念仏の効果を期待することは梁の武帝に通ずるものがあるのではありませんか。

では「功徳の宝海みちみちて」と誦された聖人はどのように功徳を味われたのでしょうか。念仏の功徳は、念仏そのもののなかに既に全現しているのです。人間の到底およびもつかぬ真如の徳の只中に浮ばしめられるのが念仏であります。だから聖人は念仏を「真如一実の功徳の宝海」（行巻）と述べられ、また「一実真如の妙理円満せる故に大宝海に譬へたまふなり」（一多証文）と申されています。かく拝したるとき念仏の功徳は、一如宝海の徳の中に今おさめ取られることであり、従ってその外に求めるべきものはなく、ただあるのは大涅槃に至らしめられる往生の大益のみであります。

それでは和讃の「煩悩の濁水へだてなし」とは如何なる意でありましょうか。煩悩の濁水とは功徳の宝海に対する言葉ですが、その濁水を「へだてなし」と言われている。へだてるとは二つに分けへだてることであります。従って「へだてなし」とは、煩悩の濁水が功徳の水の中に摂め取られて一味同体となることです。功徳の宝海は何ものをもへだてず総てをおさめとる。これは煩悩にまみれた私が念仏にあうとき確かと知らしめられる消息です。如何なる煩悩も汚濁も大悲の前には問題でなくなる。大悲無倦常照我身と仰ぎ、念仏衆生摂取不捨といただくとき、はじめて胸のつかえは融かされます。此の外にこの現実の私が救われる道はありません。

煩悩のままに摂め取られるとき、ただあるものは広大無辺な仏慈への感恩と身の慚愧あるのみです。かかる不思議の功徳が他に求められましょうか。念仏の功徳はそれ自体で満足しているのです。これを聖人は本願一乗円融無碍とも讃じられました。ここに無碍とは「煩悩悪業にさえられず破れぬをいふなり」と述べられています。これみな聖人の体験のお言葉であります。功徳を頭に思い浮べても詮ないことです。徳は脳裏の画の中にはありません。功徳は功徳の中にひたるとき、その奇しき徳用を味うことができます。

さてでは、功徳の宝海に摂め取られることは、現実の人生に無関係なのでしょうか。いや、決してそうではありますまい。徳の結果を予想し期待するとき、その期待する心が真の徳を隠す。徳を隠すということは、自からを徳から遠ざけることです。それを徳の疎外といってもよいでしょう。かかる疎外状態から転じて徳そのものにまさしく生きるとき、徳は流れて自爾として人生を潤すでありましょう。それを聖人は「現生十種の益」（信巻）として示されました。思うに聖人は期せずして恵まれる徳益を嘆じられたに違いありません。現生の益を期待するのではなく、徳の法爾に帰するとき、その徳は必ず現生に反照して奇しき光を与える。それを現生十種の益として仰がれたものと私はいただきます。

「冥衆護持」にはじまる十種の益の一つ〳〵を念仏のなかに味うとき、いかにも〳〵と頷かれます。その中で「転悪成善の益」ということは、この複雑転変の人生に直接に関係することです。業が深く尾を引いているこの私に、一つ一つの出来事がさながらに善のよろこびに転じるとは言えません。苦悩は苦悩のままなることもあるでしょう。しかし最早や単なる苦悩に止まるのではありません。このことは聖人が「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、

至徳の風静かにして衆禍の波転ず」と申されたところにもまた味うことができます。

如何なるものをも転じる至徳の中にありながら、なお苦悩に執われているこの姿にこそ大悲の涙は果しなくそそぎつづけられています。ただこの事一つを偲ぶとき苦悩の中に光がさすのです。苦悩にさす光を仰ぐとき、悪業煩悩の身が照しぬかれ、照しとられている無碍の徳をまた仰がしめられるのです。

未来に対して無上涅槃の大益をたまわり、現在において十種の徳益に浴する。これまことに功徳の宝海の賜物であります。

（九月五日、校了）

浅原才市の歌

○

わらが　めくらのこしぬけゆえに
おやの　ちからで　よがあけた
ああ　ありがたい　なむあみだぶつ

○

われとめくらを、めくらとしらず
おもうたこころの　はずかしや

○

となえるしようみよう　われかとおもうた
そうでなかった　みだのよびごえ
ああ　ありがたい　なむあみだぶつ

○

才市よい　うれしいか　ありがたいか
ありがたいときや　ありがたい
なんともないときや　なんともない
才市　なんともないときや　どぎあすりや
どがあも　しようがないよ
なむあみだぶつと、どんぐり、へんぐりしているよ
今日も来る日も、やーい　やーい

慈光日誌抄

——大悪の阿闍世われ——

本誌『慈光』八月号の「あとがき」にある故近角常音師のお歌

よしあしは人にはあらん　大悪の阿闍世われには
よしあしはなし

を拝見して、ハッと感じ入る。そして本文の「近角常音先生日誌抄」を読み、その中の「機の深信をおとしたのは、明らかに不具の信仰であり、それだと必ず狂信となり、神がかりとなる」のお言葉に深く肯ずく。そういえば東京の坂東性純兄が、先日わたしに、禅の悟りの問題点は、機の深信のないことではありませんでしょうかと語られた、そのことを想い起こす。

わたしは、なんと懈怠であり高慢である。常音師のお名前は、花田先生から承るまで、ぜんぜん存じあげなかったのである。その御令兄の近角常観師さえも、御在世中、ついにそのご法話を承る御縁を逸した。その機会は、もし求めればあった筈でございますのに。

○

西元宗助

聞法のお気持ちの深い篤信のAさんの仰せには、「家内は、家事に追われまして、殊に娘が共稼ぎの職業婦人なものですから、孫たちの世話から炊事までしておりまして、いっこうにお仏事をかまってくれません。お仏壇のお供えから、お勤めまで、みんな自分ひとりでやっています。家内はおまいりもしてくれません。これも私の業だとは思っておりますが」と、少し情気なさそうにおっしゃる。

ついで、同じく篤信のB夫人は、自分の感情を抑え抑え、しかもどうにも我慢のならぬように、「宅の老主人は、極端なケチンボで拝金主義者。わたしがお寺にまいるのも、このような会合に月に一回出席するのさえも、なにか無駄づかいしているように思っているようでして、そんなに外出すると電車賃だけでも馬鹿にならんと、いつも不気嫌な

ので困ります。どうしたらよいか、どうにもなりません。時に腹を立てながら、ときに泣きながら、ナンマンダブツでございます」と。微苦笑しながら、仰せになる。

それを一つ一つ承りながら、この世は忍土—娑婆ということを、しみじみ想わさせられる。

それにしても、われわれは、なんと自分本位なのであろう。Aさんの仰せのこともB夫人の言われることも、ことごとくが、わが身に思いあたる。

わたしは厚かましくも、いや厚顔無恥にも、わたしには他力の信心があり、家内はせいぜい自力の信心と、言葉にこそ出しませんが、そのように思ってまいりました。しかし私には信心ありと思ってまいりましたことが、根本的な深い〳〵迷妄であることを漸次、知らされてまいりました。どこまでいっても自己を是とし、他を非とする底知れぬ深い迷妄を。

くりかえして言う。われわれは、いや、この私は、所詮、われを〝よし〟とし、他を〝あし〟として生活している。たとえ、どんなに自分のほうが悪かったと言ったり思ったりしたとしても、真底は、それほど悪いとは思っていない。たとえ、罪悪深重のわが身と信知しても、自分を是とし他人を非とする根性—宿業にはかわりがない。故に宿業という。その意味においても、聖人、最晩年の、

よしあしの文字をもしらぬひとはみな
まことのこころなりけるを
善悪の字しりがほは
おほそらごとのかたちなり

のお言葉は痛切であり、意味甚深である。誰か、このわがために、この最後のご和讃—聖語をご講釈いただけぬものであろうか。ともあれ、このご和讃の背後にある聖人最晩年のご生活をただただ仰ぐものでございます。

○　○

そもそも善悪ということは、人間生活の秩序の基本になるもので、これなくしては家庭生活も社会生活も、その秩序は保たれぬであろう。しかし善悪と我執は必ず結びつく故に、人の世は闘争と苦悩は絶えない。それを指摘されたのが、まず聖徳太子でおありで、有名な十七条憲法の第十条には

「忿（こころのいかり）を絶ち、瞋（おもてのいかり）を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心あり、心各執（と）れることあり、彼是とするときは我は非とす、我是とするときは彼を非とす。我必ずしも聖（ひじり）に非ず、彼必ずしも愚（おろか）に非ず、共に是れ凡夫のみ。是非するの理たれか能く定むべき」と、お諭しになっていられる。

そして、あたかもこれを受けるようにして歎異抄には、

「善悪の二つ総じてもって存知せざるなり。その故は、如来のおん心に善しと思し召すほどに知り通したらばこそ善きを知りたるにてもあらめ、如来の悪しと思し召すほどに知り通したらばこそ悪しさを知りたるにてもあらめど、煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもてそらごとたわごと、実あることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」と、親鸞聖人が仰せになっていられる。それだけに近角常音師の先述の「よしあしは人にはあらん大悪の阿闍世われにはよしあしはなし」は、南無阿弥陀仏と、まことにありがたく感ぜられることでございます。

むすび

だいたい、わたしが仏法を聞くなどということは、本来あり得ぬことでして、わたしの自性は阿闍世、提婆とひとしく逆謗の徒でございます。それが聞法する身にならせていただいたということは、まことに仏法不可思議にて、仏法を聴聞しなければ生きていくことのできぬ深い〳〵無底の宿業をもてるわが身であるからであります。そのことを殊に家庭生活において、これでもわからぬか、これでもわからぬかと、それこそ毎日毎時—わたしもいつのまにか七十五——大悲のご催促をうけ、今げんにご催促いただいて、そのお蔭でようやく「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて」（歎異抄一条）と、ならせていただいたのでございます。

まことに煩悩無尽の生活—殊に家庭生活こそが、わたしにとりましては、不請の聞法の場であるようであります。尤も私がそのように殊勝にあるのではありません。だから不請の聞法と申したのでございますが、とまれ家庭生活は、わが宿業の催すまま、最も気随気儘に煩悩いっぱいに振舞う宿業の大地でありますだけに、法蔵菩薩の大悲のご苦労の場所、われらの仏法を聴聞させていただく場所、すなわち念仏申させていただく場所なのでございます。

ここまで書き終えたところに、花田先生から、玉葉をたまわりました。それは残暑お見舞とかねて、奥様のご近況をうかがった拙葉へのご返信でありますが、その末尾に、「家内は歩行困難で、杖にすがって家の中をやっとのとこころ、やがて寝たきり養護老人ホーム入りと思いますが、一日一日を大切にしております」と。お炊事、お洗濯など、どうしていられることかと案じつつ、お役にたたぬまま沈思することでありました。

内愚外賢

長谷顕性

善道大師は観経の散善義に「不」得外現賢善精進之相内懐虚仮」とおおせられていますが、これは申すまでもなく、観経の三心の第一なる至誠心とは、真実心（まことのこころ）であるとおさえて、阿弥陀さまが私共を救わんがために真実心になってお向い下さることであるから、私共も真実心になっておうけしなければならぬ。それだから私共は外面だけ真実心になったようすで、しかも内心がその反対なる虚仮心であってはならぬ、とおしえられたものでありましょう。然らば右のお言葉は「外に賢善精進の相を現じて、内に虚仮を懐くことを得ざれ」と読めるわけで、そう読むのが自然でありましょう。法然上人もそのようにお読みになっていたとうかがわれます。上人の選択集の三心章の私釈では「至誠心とは是れ真実心なり、その相彼の文の如し」といい次いで「但外現賢善精進相内懐虚仮とは、外とは……、賢とは……善とは……」と一々おさえて終に、「外に精進の相を示して内に即ち懈怠心を懐くなり」すなわち外相は賢……にして内心は愚なるをいうと説明し「若しそれ外を翻へして内に蓄へば、祇に出要に備へつべし」と結んでいられます。それは外相と同じく内心もそのとおりになるならば、それがまことであって仏のお救いにあずかることが出来るにまちがいないとのおぼしめしであります。然しそういうことは上人にしてみれば私共には到底できないことであるとお感じになっていたと愚考いたします。されば上人は更につづけて、内懐虚仮等とはと一々説明し、「謂く内は仮にして外は真なり」といい最後に「若しそれ内を翻へして外に播さば亦出要に足ぬべし」と断じておいでになります。すなわち内心が愚であってもそれをかくすことなく、ありのままに外にあらわすようであればこれも亦、まことのお救いにあずかれるのであるというのであります。

愚考いたしまするに、まことなき身と知ったらばそれをありのままにあらわすことがまことのこころに契うみちであるとのお意でありましょう。然れば法然上人は自ら愚であると、愚痴の法然房、十悪の法然房と自称されています。一枚起請文にもありますように「念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよく〳〵学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、智者の振舞をせずして唯一向に念仏すべし」とおすすめなされたのでありましょう。されば上人のこのおんすすめをうけて、わが親鸞聖人は善導大師さまの文をば「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐けばなり」とお読みかえになっています。――聖人にとっては善導大師がこのように教えたまうのであるといただかれたのでありましょう。聖人御自身、内心に愚を懐きながら外にはそれと反対の賢善者ぶる虚仮不実のわが身なることを痛切にお気づきになって居ります。このことは唯信抄文意の中にもあきらかにあらわれております。「不得外現賢善之相というは、浄土をねがふ人はあらわにかしこきすがた、善人のかたちをふるまはざれ、精進なるすがたを示すことなかれとなり……世をすつるも名のこころ利のこころをさきとする故なり、しかれば善人にもあらず、賢人にもあらず、精進のこころもなし、懈怠のこころのみにして内はむなしく、いつはりかざりへつらふ心のみつねにしてまことなる心なき身としるべし」とあります。唯信抄文意は申すまでもなく、聖覚法印の作られた唯信抄中の要文を、聖人がそのこころをやわらげて門弟にお示しになったものでありますからこれこそ法然上人のおこころといただかれたのであると思われます。然しながら聖人ご自身にとっては、法然上人や聖覚法印のようにすなおに愚をあらわそうといくらつとめても、つとめても、そうなり得ない自分の自性を明かにお気づきになってをります。「…となり」「…と知るべし」のお言葉の上にそれがうかがわれます。されば聖人にしてみれば、内外共に真実になり得ないのみならず、内外共に不実なることをあらわすこともなし得ざる身なることを、すなわち、徹頭徹尾、真実心なき身と痛切にお気付きになっているのであります。そしてこれこそ私共の正体であること、阿弥陀さまが救わんとおぼしめしたちたまえるおめあてであることをお示し下されたのであるといただかれるのであります。

この事から愚禿鈔にあらわれます聖人のお言葉がいただかれるようです。「賢者の信を聞きて愚禿が心をあらはす。賢者の信は内は賢にして外は愚なり。愚禿が心は内は愚にして外は賢なり」と。賢者とはここでは法然上人であります。法然上人は幼にして勢至丸といわれ、長じて智慧第一の法然房と世に称えられた方ですが、生死を離れるには、自分の力では到底不可能であると真に自分の愚に徹し、その愚人のために阿弥陀仏が御苦労下されて、南無阿弥陀仏を称えよと向わせたまうことを善導大師のご指南によって

始めて信じなされ、愚のすがたを外にあらわして念仏したもうたのであります。聖人はこのお相を拝して法然上人は賢者でありながら私共を救いに導かんがために、自分の内心は愚なりとありのままに愚のすがたを示したまうのであるといただかれたのでありましょう、賢者の信は内は賢にして外は愚なりとはこのことでございましょう。次にこの上人のお相に照して、自分の心を顕かにしていただくと、愚禿の心は内は愚にして外は賢なり、自分は本来愚でありながら、それを知らずに賢なりと思いあがって来たが、法然上人のみ教に接して愚であることを知らしめられ念仏する身となったのであるけれども、自分は愚であると意識しつつあるにもかゝわらず、その下に賢なる者という心がうごめいて賢者ぶったすがたを表わしている。まったく虚仮不実の自分であるとざんげしたまうのであります。加之虚仮であるのみならず、邪偽ですらあるのだと告白していられます。愚禿抄の下巻の終りに、内外対として、内外道外仏教……内疑情外信心……内悪性外善性……内偽外真……内怯弱外強剛……内懈怠外勇猛……内自力外他力、とお示しになっていますし、また愚禿悲歎述懐和讃には「浄土真宗に帰すれども真実の心はありがたし、虚仮不実の我身にて清浄の心も更になし」、「外儀のすがたはひとごとに賢善精進現ぜしむ、貪瞋邪偽おほきゆえ、姦詐ももはし身に

みてり」、「悪性さらにやめがたし、こころは蛇蝎のごとくなり、修善も雑毒なるゆえに虚仮の行とぞなづけたる」ともあります。

さて今月の慈光誌（三十六巻第七号）に福島先生の丙愚外賢と題してのお話が載ってをりまして、日頃思っていたことを一々身にひきあててお示しになっているのを、有難く拝見いたしました。但しただひとつだけ、ちょっと私の心にゆきつかぬことがありましたので、あらためて聖人のお言葉を味い直してみました。福島先生が善人悪人ということに就いて、法然上人は悪人であり、親鸞聖人は善人である。そしてこの善人たる私さえ往生をとげるのであるからまして悪人たる法然上人はなほさらであると歎異抄第三章の意趣と結びつけてお述べになっていることであります。

愚考いたしまするに法然上人は自ら悪人であると自覚なされてすなおに念仏して悪人のすがたを外に現わしておいでになる、所謂、自覚せる悪人であるといわれますのは、そのままいただかれますが、親鸞聖人は自力作善の善人であるといわれますのはちょっといただけません。親鸞聖人も亦法然上人のみ教によって悪人であることを自覚なされた方であるといただきます。このことは歎異抄第二章にも明かにあらわれています。その意味からして聖人も亦自覚せる悪人といわなければならぬのでないでしょうか。然るに、

悪人にしてみれば法然上人のお相を拝したてまつる時、自分の心の中に善人づらをする悪性がバン居していて、その不実なる牢として抜けがたく、いやどうすることもできない身なることを知らされ、いまはただこの私のすべてを見とおしたまえる南無阿弥陀仏の真実をいただくひとつなることをお知りなされたのでありましょう。されば、先の散善義の文中に、善導大師が「必ず真実心中に作すべし」（必須真実心中作）とおっしゃるのを、「必ず真実心中に作したまへるを須いよ」とおよみかえになっていることもいただけることであります。私の味わいみな様の御叱正をおねがいいたします。

（昭五九・八・一七日　稿了）

浅原才市のうた

○

これさいち　よろこびは　あてにはならぬの
きえてにげるぞ
にげぬ御慈悲は　親の慈悲

なむあみだぶに　心とられて
これにさいちが　たすけられ
御恩うれしや　なむあみだぶつ

○

わたしや　あなたに　をがまれて
たすかってくれと　をがまれて
ごをんうれしや　なむあみだぶつ

○　○

子の心、子の心は　親の心よ
親の心　親の心は　子の心
親子の心　二つなし
ひとつ心　機法一体　なむあみだぶつ
なむあみだぶつの外はなし
なむあみだぶつを助けたり
なむあみだぶつに助けられたり
ごおんうれしや　なむあみだぶつ

凡夫往生の白道

花田正夫

凡人の歩み

凡人とは平々凡々な私共のことである。さて私共は先ず自分の欲望のままに手当り次第にむさぼって行く。或は名を、或は財を、或は愛をと得られそうなことに我武者羅に突進するが、欲望に限りのない身は、底のない槽に水が満ちることがないように、いつも足らぬ〳〵となって不満と焦慮が続く。

それと同時に、幼い時から、よくなれ、かしこくなれ、でないと人々から呆れられ見捨てられるぞとくりかえしまきかえし、事ごとに教えこまれるので自然にそれが身について、たどたどしい歩みながらそれを努めてきた。

然しその道は茨が一杯繁っていて誠に険しい、すこしでも善いとなると、我れ善し彼れ悪しとなり、悪いと俺ばかりじゃないと云い乍らも卑屈におち、学校ですこし成績がよいと慢心、よくないと愚痴を流し、智愚の毒、善悪の鎖に縛られる。

それでいてなを、明日は、明日こそは、と徒らに海路の日和を待って、性こりもなく、茨の道をたどる。若山牧水の、幾山河こえさり行かばさびしさのはてなん国ぞ今日も旅行く、の歎きと、藤村の詩、悲しきかなや人の身の、なきなぐさめを尋ねわび、道なき森に分け入りて、などなき道をもとむらん、の悲しみを繰りかえしながら墓場への道をたどるのである。

凡夫の求道

我々はすぐ、凡夫だからと口にするが、それを自分の言いわけにしていて、凡夫の自覚はない。それは夢中夢を知らず、醒めてのちに夢と知り、山に居て山がわからず、山を出て山の全景が見えるのと同じで、凡夫は自ら凡夫とは気づかぬ。十地経に「菩薩の第八地、不動地に達して、はじめて凡夫地を脱するが故に凡夫と知る」とある。

して見れば、仏の御目に我々の姿を見抜かれて、凡夫と仰せになるのである。またその教を身につけられたよき人々によって、凡夫ぞと教えられるばかりである。

親鸞聖人の『一念多念証文』に「凡夫といふは、無明煩悩われらが身にみち〳〵て、欲もおほく、瞋り腹立ち、そねみねたむ心多く間なくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらずきえずたえずと、水火二河の譬にあらはれたり」とある。こうした煩悩具足の身故に、業縁の催しによってはどういう業さらしをするかも知れず、それかと云ってどうやって見てもまよいを出ることが出来ないで、臨終まで浮きつ沈みつ苦しまねばならぬと聖人は仰言っている。

盤珪禅師は「血で汚れたものを血で洗ってもまた汚れる」と警告され、碧巌録には「瓦をどんなに磨いても光沢は出ない」と誡められている。他山の石であるが、ルーテルは「洗えば洗うほど汚れる手」と歎いている。

凡夫の往生

『歎異抄』に「罪悪深重煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願」を指差され、又「煩悩具足のわれらはいづれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり」と、たすかるべからざる煩悩の塊の身を往生成仏せしめて下さる、不思議な弥陀の本願ましますとお知らせ下さるのである。

鏡は鏡自身を写し得ないように、我々は我々自身を知ることは出来ないが、そうした身をかねて知ろし召されて、その者をたすけとげずば御自身も成仏しない、とお誓い下さるのである。この御慈悲を聞いて、はじめて自分の姿が照らし出されるのである。このことを近角先生は「手織りの着物」と題されて、終生くりかえしてお話し下さったのである。それは、先生が欧米の宗教事情を視察されて帰国後各地を巡講されていた時、お母上が手織の着物を送って下された。先生はそれは有難いことであるが、当時織機も普及している時に苦労して手織りにしなくてもと、軽く見られていた。ところが先生は汗かきで講話されるたびに着物を洗濯せねばならないので、すぐ着物が駄目になった、その時、手織の着物だけはいくら洗濯しても悪くならないのに気付かれて、始めて、自分が汗かきの乱暴者であるから母が苦労して下さったと気付かれて、はじめて押しいただかれた、はじめは物だけを受取っていたが、母の心がその時知れた、と云われ、名号と本願もその通りであると、語られたのであった。先生は又よく「奥山に枝折り枝折るは誰かためぞ、親の身すてて帰る子のため」の一首を引かれて親を捨る子をなお心配される親の慈愛によって、自分の親不孝を知って、母を背負うて山を下った話も度々して下さったのである。

唯信抄文意に「釈迦如来よろづの善の中より名号をえら

びとりて、五濁悪時、悪世界、悪衆生、邪見、無信の者にあたへたまへるなりと知るべし」とあるのを拝読して、自分の邪見、無信の身故の御苦労が渇仰させられる。

又観経に、曽て一善もなく悪業のみを続けた者の臨終に善き人が弥陀仏の徳をとかれたが、死に頻して苦しいばっかりで仏を念うことも出来ぬのを見て、「汝若し念ずることあたはずんば、口に無量寿仏の名を称へよ」と勧められると、十声念仏して命終し、浄土に往生させて頂いた、とある。

それにつけて島根の篤信の教育者の川上清吉氏の述懐を憶う。氏が幼い子を亡くされたが、病のはじめは、子の名を呼んで〝しっかりせよ〟〝元気を出せ〟と励ましていたが、いよ〳〵病がすすみ、重態になると〝お父さんはここに居るぞ！わかるかい〟と子を抱いて呼び続けた、とある。弥陀仏が御自ら南無阿弥陀仏と名告って下さり、我が名を呼べと呼び続けて下さるおこころの片鱗が知らされる。

さて日本の浄土教は、浄土の三部経を中心に中国の道綽禅師と善導大師の流れをうけて、源信僧都をはじめとし法然聖人によって提唱され、老少善悪の人をえらばず、一切の凡夫の念仏成仏する道を掲げて下さったのであるが、奈良仏教の人々はこれに反対し、凡夫が念仏申すぐらいで真実の浄土に往生するはずはない、観経にイダイケ夫人が念仏往生したのは、夫人が権化の人であったからだと駁論した。また北嶺の天台仏教者は、凡夫も念仏で浄土に生れるが、それは報土でなく低い浄土であると主張した。

このことはすでに中国の善導大師の時代にも、観念念仏を重んじ、称名を軽視していたが、大師がひとり、観経の四帖疏を著わされて、経典の中から、イダイケは実際に凡夫であると証明せられて称名念仏をお勧め下さったのである。惟うに、たすかるべからざる者が、本願の不思議の力で真実の浄土に往生出来るとは一般人の常識からはうけとり難く、極難の信であると申される所以である。

凡夫往生の実際

歎異抄九章の後半に「またいそぎ参りたき心の無くて、いささか所労のこともあれば、死なんずるやらんと心細くおぼゆることも煩悩の所為なり、久遠劫より今まで流転せる苦悩の旧里は棄て難く未だ生れざる安養の浄土はこひしからず候ふこと、まことによく〳〵煩悩の興盛に候ふにこそ、名残り惜しく思へども娑婆の縁尽きて力なくして終るときに彼の土へは参るべきなり。いそぎ参りたき心なき者をことに憫みたまふなり、これにつけてこそいよ〳〵大悲大願は頼しく往生は決定と存じ候へ」とある。この一節は沢山の念仏者の最後に大きな力となって下さるのである。

『口伝抄』十七に、この凡夫のありさまをとかれて「凡夫として毎事勇猛のふるまひみな虚仮たること」と掲げら

れて、「うしろ枕にならびいて悲歎鳴咽し、左右に群集して恋慕涕泣すともさらにそれによるべからず。さなからんこそ凡夫げもなくてほとんど他力往生の機には不相応なるかやとも嫌はれつべけれ云々」と凡夫の素地のなりに往生成仏させて下さると教えられる。

池山榮吉先生の奥様は三十九歳で胃癌で五人のお子さんを残して亡くなられたが、それを機縁とされてかねてお聞きになっていた念仏の教を深くお喜びになった。広島県の松江岩人さんが見舞に行かれたが、非常にお喜びになっていたので、歎異抄には「久遠劫より流転せる苦悩の旧里はすてがたく未だ生れざる安養の浄土はこひしからず候」とありますが、奥様はお浄土の近づく事が喜ばれるでしょうなと申上げたところ、「いいえ私は少しも死にたい事はありません。一日でも生き延びたいです。主人の為、老母様や子供達のために生きねばなりません。未来のことなど何とも思った事はありません。矢張り歎異抄の通りです。併し今この通りお助けに預って居ります以上、未来も決して御見捨て下さらぬと信じております云々」と答えられた。

又その頃近角先生が御見舞の法話会を催されて次の法話をされた。

「撫順の炭抗の爆発で一命を拾った向坊さんは、日頃から剛信のお方であったが、突然爆発で人事不省になった時、〝しまった〟と大声を発したそうである。幸に種々の手当を続けて、南無阿弥陀仏々々々で息を吹き返した。普通あれ程喜んでいる人が南無阿弥陀仏ならとにかく、しまったで倒れたのはおかしいと思われ易いが、よく考えて見ると、しまったより外に出ぬはずである。我々が病気でたおれる時も同様である云々」

これを聞かれて夫人は非常に喜ばれて「実は先日からひどく痛むと、念仏も出来ぬことがあります。それでもお見捨てないとは頂いて居りますが、今この有様ではいよ〳〵の時どんな有様で引きとらせて貰えますか、皆の者に誤解を与えはせぬかと気になっていましたが、しまったの一言しかないのが本当と承って、はじめて安心しました」とのことであった。

池山先生のこの世での最後のお言葉は、

「何も残るものはない、何も残るものはない
ただ念仏だけが残ってくれる、ただ念仏だけが残る。
えらいこったよ、有難いこったよ」

と云われ、寝台の正面に掛けてある「一心正念直来」の軸をじっと見つめ、やがて「親鸞におきてはただ念仏して」の軸をいかにも満足そうに見入られ、やがて声高らかにお念仏されました。一切の言葉は失われたのに、お念仏ばかりを不思議に申されたのです。

あとがき

今年の夏はきびしい暑さでしたが、やっと秋風に涼味を覚えほっとしております。

本月は浄土教の濫觴となりました王舎城の悲劇とその救済について近角先生の懺悔録からいただきました、聖人が「これすなはち権化の仁、ひとしく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を恵まんと欲してなり」と随喜されたところであります。

又池山先生の御晩年最後の公開講話を「仏の人」から引き続き頂きました。次号に続きます。

誉田様は福岡の教育者で、その信徳は各方面に及びました。その信の旅に気づかれたことを「聞思鈔抄」から頂きました。

井上先生は念仏の宝海を仏力によって自然に恵まれることをお述べ下さり、我等が身勝手な功利的願いではないことを明示して下さいました。

西元先生は近角常音先生の「大悪の阿闍世われ」と慚愧された機の深信の大切さをお述べ下さいました。聖人が本願をわが身に頂かれて「さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを」と慚愧していられることも思い併せられました。

長谷先生は、久々にお原稿を頂き、いつに変らぬ謙虚さに心うたれました。ことに聖人の信仰がそのまま法然上人から伝承して下さり微塵のくるいのないことを告げて下さいました。御味読願います。

私の拙文は、凡夫のありのままの姿で御救いにあずかることの有難さを書きました。善人になりたがる私を深く反省させられました。念仏によって立派な臨終を迎えられるように身勝手に願っていたことの間違い、どういう死にざまになるかわからぬ者をお見捨てない大悲を渇御申すばかりであります。

——御案内——

十月二十一日の例会をお隣の鬼頭康彦様宅で催させていただけると思います。聞法の秋、草木のみのって頭を下げる姿に励まされていきましょう。

慈光　第三十六巻第十号　昭和五十九年十月十五日発行　（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

定価　半年　八〇〇円（送共）
一年　一六〇〇円（送共）
編集　発行人　花田正夫
名古屋市南区駈上一丁目十四ー二九
電話　八二一局七〇三七番
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　坂部光雄
名古屋市南区駈上一丁目十四ー二九
発行人　慈光社
振替口座　名古屋　六ー一〇四七〇番
郵便番号　四五七